



こだま

第1号

発行日 平成28年10月5日

発行 大谷小学校PTA

編集 PTA広報委員会

表紙 5～7月度の各行事





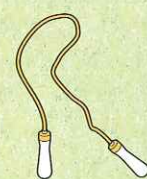
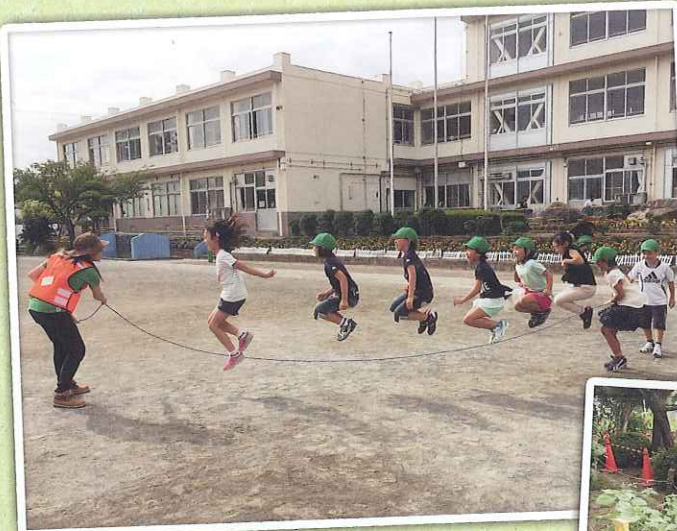
子どもたちの声

- ◆友達と遊べるしおもしろいから、また行きたいです。
- ◆思い切り遊べて楽しい。また参加したいです。
- ◆次はボール遊びや縄跳び以外の、いろんな遊びをやりたいです。



運営スタッフの声

- ◆子どもたちの喜び姿がとっても眩しいです。
- ◆運営スタッフの人数が、子どもたちに対して少し足りていない気がします。
- ◆異学年と交流する機会が、もっとあるといいと思います。こういう時こそ、普段遊ばない友達とも遊んで欲しいです。
- ◆学生ボランティアの方々にも、手伝ってもらえたらありがたい。子どもたちも、一緒に遊んでくれるお兄さん・お姉さんがいてくれたら楽しいと思います。
- ◆前期が終了したら、保護者の方々にアンケートを取って、今後の活動に生かしていきたいと考えています。



お天気の良い日は、元気いっぱいに遊ぶ子どもたちの声が、放課後の校庭に響いています。



授業中や休み時間中にやり切れなかった、花壇や畑の水やりや草取りをやる子どもの姿もありました。



運営は地域のスタッフにより行われ、子どもたちが遊んでいる様子を見守ります。また、怪我をした時の応急処置などの準備も整えられているという点からも、「安心・安全」と言えます。ただ遊びに関しては、子どもたちの考えて行動する力を生み出すためにも、あまり口出しはしないようにしているとのことでした。上級生のリーダーシップに、期待のかかる所です。

今後、より充実した放課後時間にしていくために…

「現状では校庭でのボール遊びや縄跳びが主な遊びとなっていますが、今後はイベントなども考えていきたい」と、ボランティアスタッフの中からは声が挙がっているそうです。ただ、子どもたちの人数に対して

スタッフが追いつかなくなってしまう懸念もあるとのこと。スタッフ内のチームワークは抜群だけに、今後は静岡大学の学生さんに声を掛けてみるなど、「地域」の裾野を広げていくことも課題だそうです。



こちら
大谷情報局

地域ので成り立つ放課後

放課後の時間を使い、安心・安全な体験の場やふれあいの場を提供するために始まった『おおやわんパーク』。そこには社会教育事業の一つとして、地域が一体となって子育てに取り組む姿がありました。『おおやわんパーク』により、子どもたちの放課後はどのように変化していくのでしょうか？



最初に受付で名簿にチェックし、荷物をまとめて置いておきます。

外に出られる日は校庭で、雨の日は体育館で遊びます。



『おおやわんパーク』は16時15分まで。帰りも受付の名簿にチェック。
※冬季は終了時間に変更あり

放課後子ども教室『おおやわんパーク』を徹底解析!!

- ✓ 子どもの居場所や様々な体験の場作り
- ✓ 子どもが自分で考え、行動する場作り
- ✓ 地域との交流、ふれあいの場作り
- ✓ 異学年交流によって、上級生が自然と指導力を身につけられる場作り

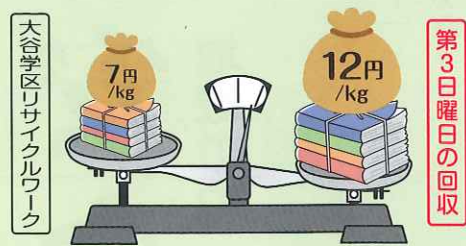
放課後子ども教室『おおやわんパーク』は、1年生から6年生までみんなが参加できる体験の場・ふれあいの場として、2016年6月8日(木)より、静岡市内の公立小学校では23番目に始まりました。子どもたちが通い慣れている学校の施設を利用して、様々な体験活動や、地域の人・異学年の児童との交流を行うことで、子どもたちの自主性や社会性、創造性を育んでいきます。参加は無料、事前申し込みの必要もなく、帰る時間も自由なので、気軽に参加できます。地域の積極的な参画が、地域教育力の向上にもつながっていくと期待され、今大注目の社会教育事業です。



大谷街道沿いにある学校近くに設置された「大谷学区リサイクルワーク」なら、金額の差はありますが、第3日曜日の回収と同様、出した古紙が大谷学区の収入に繋がります。

出す場所1つでこんなにも違う!? 賢く出して、地域に貢献!!

第3日曜日の古紙回収率は、年々減少傾向にありましたが、2014年より学校近くに「大谷学区リサイクルワーク」を設置したことで、年間収入は回復しました。ところが、いつでも出せるという利点がある一方で、「大谷学区リサイクルワーク」には維持管理費が発生するため、古紙1kg当たりの収入には5円もの差が生じます。大谷学区の収入には繋がらない近所のリサイクルステーションに出すよりは学校近くの「大谷学区リサイクルワーク」に、「大谷学区リサイクルワーク」よりも第3日曜日に出してもらえるというのが本音です。



お花と古紙の 意外な関係



校舎の前に広がる見事な花壇。
この花壇の維持管理のために、
リサイクルワークの収益
金も使われています。



そうだったのか!!

サイ クル 活 動

家庭のゴミが社会貢献に!? 知って得する

学区のリサイクルワークはいつから始まった?

今から15年以上前の1999年、地球環境保護を目的に、学区のリサイクルワークが始められました。その当時は、古紙は生ゴミと一緒に捨てられていた時代。そのため、町内会、廃棄物減量等推進員、社会福祉協議会、大谷幼稚園PTA、ボランティアによって、リサイクルワークが行われていました。大谷小学校PTAも、学校で古紙回収活動を行っていたこともあり参加。1年近く話し合いを重ねながら準備をすることで、本格的なスタートに漕ぎ着けました。大谷小学校PTAは、学区のリサイクルワークが始まったことで、古紙の積み込みの負担が軽減されたのだとか。今では、当番として各回収場所に立ち、ビニール紐で縛られていないかなどのチェックをする役割を担っています。

古紙回収による収入とその還元先

学区のリサイクルワークが始まった当初は、古紙の原価が低かったため、古紙回収業者にお金を支払って回収をしてもらいました。ところが、スタートから1〜2年が過ぎた頃、古紙の原価が上昇。それにより、現在のように古紙回収による「収入」を得られるようになりました。2015年度は、年間で約308万円もの収入が大谷学区に入りました。大谷小学校PTAが古紙回収活動を行っていた頃の実績や「子どもたちのため」という理由から、この収入の一部がPTAの活動費として還元されています。そのため、できる限り古紙は第3日曜日に回収される学区のリサイクルワークで出してもらいたいというのが、地域やPTAからの切なる願いです。

古紙回収に興味を持ってもらうために…

毎年、各町内で行っている清掃工場の見学。実は、古紙に興味を持つきっかけになることも願って行われています。また、大谷祭りで行われるくじ引きは、収入を地域へ還元すること、古紙回収を行っていることをアピールすることが目的で始められました。くじ引きの景品がトイレットペーパーなのも、古紙がトイレットペーパーへとリサイクルされていることを知ってもらうためです。もっとも子どもたちは、トイレットペーパーよりもお菓子などの方が喜ぶということから、「還元」という意味も込めて、様々な景品を用意していますが…。

子どもの命を救う エコキャップ運動



大谷小学校では、ペットボトルのキャップを回収していることを、ご存知でしたか? 実はコレ、回収したキャップをポリオワクチンにするために行われています。キャップ430個(11約1kg)で10円になり、ポリオワクチンは1人分で20円が必要なので、キャップ860個で1人分のワクチンとなります。前回の集計では、108kg分の回収で収益は1080円、およそ54人分のポリオワクチンになりました。世界中の子どもたちの命を救うために、今後もご協力をお願い致します。

回収ボックスは職員室の前に設置してあります。



「声掛け」「見回り」「見守り」安心・安全な毎日を陰で支える保護者と地域 大谷の子どもを守る大人の取り組み



「いつも安全運転をありがとうございます」と、丁寧に一台一台に声を掛けています。



交 コツコツと、丁寧に 交通安全運動

学校周辺や通学路に、黄色いのぼり旗が並んでいるのを、一度は目にしたことがあると思います。これは、PTA交通安全委員と地域の方によって交通安全運動が行われる日に立てられ、信号待ちのドライバーさんにティッシュ配りしながら、交通安全を呼びかける街頭活動が実施されます。こうした小さな活動の積み重ねが、大きな事故の未然防止に繋がっているのです。

旗 雨の日も風の日も 振り当番

通学路の交差点に朝早くから立ち、保護者の方が子どもたちの安全のために行われている旗振り。挨拶をしたり、声をかけることでコミュニケーションにも繋がり、通学中の子どもたちを見守る活動も果たします。頻度は地区によって様々ですが、1ヶ月に1回くらいで回り、雨の日でも毎日実施されています。



防 心強い地域の「目」 防犯パトロール

地域の方々によって月に1回実施されている、町内の見回り活動。5~6人で班を作り、のぼり旗を持ち、防犯ベスト着用して、子どもたちの下校時間にあたる夕方に実施されています。



日常生活の一工夫が、子どもを守る活動に

小学生が最も事故や事件に遭いやすいのは、下校の時間帯からです。まずは、子どもたち自身が「自分の身は自分で守る」という意識を持つことが大切です。たとえ信号が青でも、一呼吸おいて左右を確認した上で横断歩道を渡りましょう。そして周りの大人たちにできることは、犬の散歩やウォーキング、買い物など日常生活の中でいつもしていることを、なるべく下校時間に合わせることです。学校・家庭・地域が協力し合うことが、安心・安全な地域をつくり出す第一歩となるでしょう。



『交通安全リーダーと語る会』では、交通安全指導員の方のアドバイスもありました。



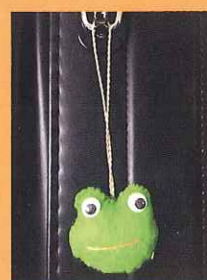
発表資料やスライドは、すべて子どもたち自身の手で作られました。



地区ごとと分かれての話し合いは、保護者や地域の方の参加で、内容は更に濃くなりました。

子どもたちの声

- ◆ 危険な場所が多いので、自分自身が交通安全リーダーとして、気を付けようと思いました。
- ◆ カーブミラーの無い所では、左右の確認を意識することが大切だと思いました。
- ◆ 交通安全指導員の方に大谷街道の自転車の乗り方を教えてもらう中で、知らないこともあったので、教えてもらったことを活かして、安全に気を付けて自転車に乗りたいです。
- ◆ 住んでいる地区の今まで知らなかった危険な場所を知ることができたので、これから気を付けて登下校したり、遊んだりしたいです。



ランドセルに着いた 交通安全の「守り神」

新1年生に配られるマスコット。これはPTA交通安全委員による手作りで、作った後はわざわざ久能山東照宮まで行き、必ずご祈禱もされているのです。



単に危険箇所の確認のみならず、総合的な学習により、課題設定や計画立案、問題解決、発信、検証などの力も養います。

三位一体の安心・安全

学校
家庭
地域の

「住みよい地域」をつくり出す子どもの力、保護者の力、地域の力

「リーダー」としての
自覚と意識と決意

6年生が「交通安全リーダー」としての自覚を持ち、低学年の見本となる交通ルールを身に付け、交通安全を推進していく意欲を高めるために毎年行われている『交通安全リーダーと語る会』。7月22日(金)の5時間目、大谷地区交通安全会やPTA交通安全委員、交通安全指導員の方々が見守る中、行われました。子どもたちの発表をベースに、地域の危険箇所の確認や危険体験談などが話し合われ、保護者や地域の方と共に、交通安全への意識を新たにしていきました。

すべては大谷の子どもたちのために…



Special Interview

校長先生は“子どもたちと一緒に”がとってもお似合いです

石川 正巳 先生

通学路で旗振りをする保護者に「ありがとうございます」と声を掛け、登校してくる子どもたちと共に通学路を歩いて回る校長先生。そんな徹底した“現場主義”に込められたメッセージとは？

「現場」とのつながりを大切に：

朝は学区内の通学路を歩いて、登校してくる子どもたちの様子を見守り、授業時間中は校舎内を回って、たまにクラスへ入る…忙しい中で時間を見つけては、自分の目で、足で「現場」を見て回るのは、今年度から校長先生として着任された石川正巳先生——「大谷小学校に来る前の3年間は、教育委員会にいましたが、そこは子どもたちのいない環境だったので、寂しい思いもありました。あちこち出回っているのは、その反動もあるのかもしれませんが（笑）」——教育の現場の中心は子どもたち。校長先生も「教員」…こうした想いがあるからこそ、「現場」とのつながりを大切に、常に子どもたちの近くにいることを、考えられているようです。「大谷小学校の子どもたちは元気に挨拶をしてくれるし、子どもたちから声を掛けてきてくれるので、とても人懐っこく感じます。そして集会になると、しっかりと人の話を聞く姿勢があります。こうした良い所を伸ばしていきたいように、子どもたちをサポートしていきたいです」と石川先生。子どもたちの成長を、現場レベルで見守ってくれる…親しみがあり、そしてとても頼もしい校長先生が、やって来しました。

子どもたちとの「距離」

そんな石川先生が、小学校の教員を志した理由に、子どもたちとの「距離」が挙げられるそうです——「私が小学生の頃、社会科を教えてくれた級外の先生が、教室の外に出て学ぶ楽しさを教えてくれました。学校の裏山を探索したり、海や沢へ行ったり…自然の中で学ばせてくれる、こんな先生になりたいなあと考えた

ことが、教員を目指したキッカケです。最初は中学校の社会科教員を志望していましたが、教育実習で小学校へ行った時、小学生の可愛らしさやいろんな教科を教えられる楽しさ、そして子どもたちとの「距離」の近さを感じられたことで、小学校の教員を志すようになりました——

時間の許す限り「現場」を回る、石川先生らしいエピソードですね。今年度の運動会では、3年生の徒競走に参加されました。運動会は、あさかゼブラランの第1ステージの集大成。仲間と共に学び、喜びを分かち合える関係を築いていく段階において、石川先生自身もその仲間の輪の中に入っていたということでしょう。

「郷土を大切に想う心」を養うために：

今後の教育の方向性に関しては、かつての石川先生がそうだったように、教室の外や学校周辺の自然の中における「学び」も大切にしていきたいとのこと——「子どもたちには、地域の方々と接することで、『自分が育ってきた地域』『自分を育ててくれている地域』という意識を持ち、郷土を大切に想う心を養って欲しいです。家族、学校、地域などの身近な所に対する『ありがとう』の気持ちを常に忘れず、笑顔あふれる大谷小学校にしていきたいですね」と石川先生。様々な「現場」に足を運び、そこから「学び」を見つけてのこと…その大切さを、自らの行動によって、子どもたちに伝えてくれている気がします。

